

## II 全国学力・学習状況調査からみた長野県の成果と課題

### 1 教科に関する調査の結果と分析

#### (1) 令和5年度 教科に関する調査の結果と分析

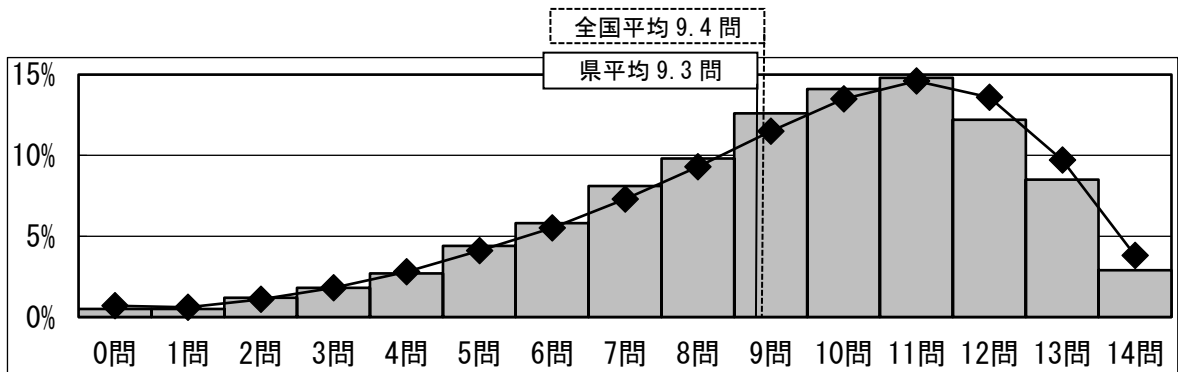
ア 小学校における平均正答率及び平均正答数、正答数分布と分析

(ア) 平均正答率及び平均正答数、正答数分布

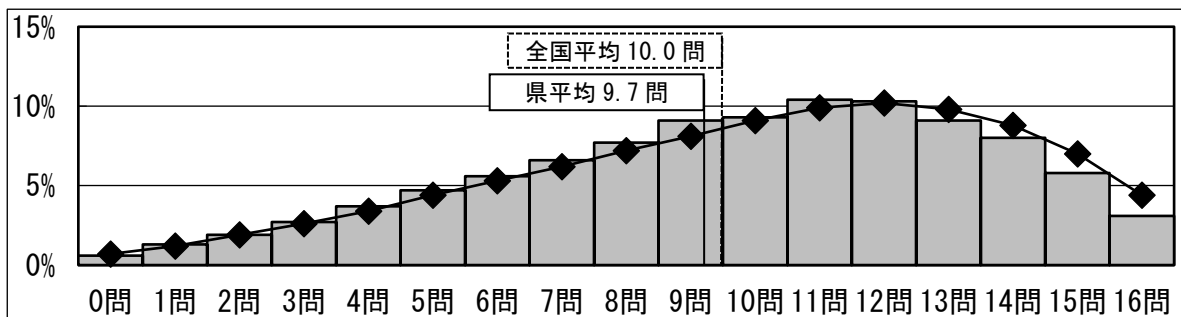
〔表Ⅱ-1〕 教科に関する調査の平均正答率及び平均正答数（小学校）

科目	区 分	平均正答率	平均正答数／全問数
国語	長野県（公立）	66%	9.3／14問
	全 国（公立）	67.2%	9.4／14問
算数	長野県（公立）	61%	9.7／16問
	全 国（公立）	62.5%	10.0／16問

〔グラフⅡ-1〕 正答数分布グラフ（国語）※グラフⅡ-1、2の横軸は正答数、縦軸は割合を示す。



〔グラフⅡ-2〕 正答数分布グラフ（算数）



(イ) 分析

- ・国語の平均正答数は、全国と同程度である。(表Ⅱ-1)
- ・算数の平均正答数は、全国を0.3ポイント下回った。(表Ⅱ-1)
- ・国語と算数の正答数の分布は、全国とほぼ同様の傾向である。(グラフⅡ-1、2)
- ・国語では、正答数が7問から10問の児童の割合が全国平均よりも高く、正答数が12問以上の児童の割合が全国平均よりも低い。(グラフⅡ-1)
- ・算数では、正答数が7問から9問の児童の割合が全国平均よりも高く、正答数が13問以上の児童の割合が全国平均よりも低い。(グラフⅡ-2)

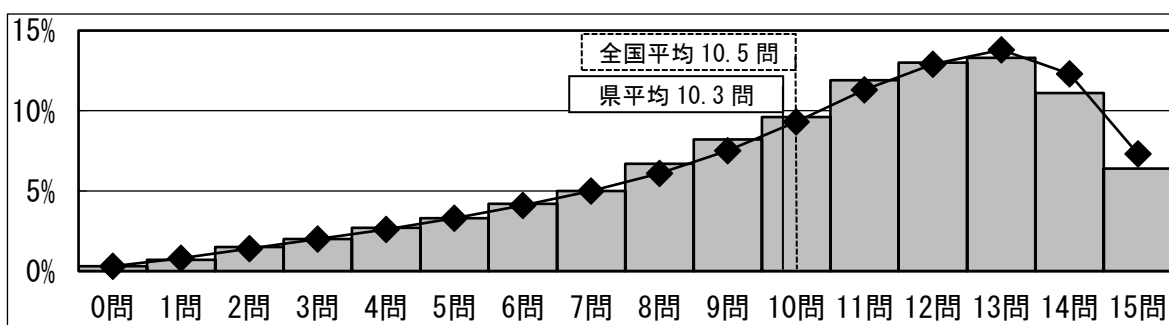
イ 中学校における平均正答率及び平均正答数、正答数分布と分析

(ア) 平均正答率及び平均正答数、正答数分布

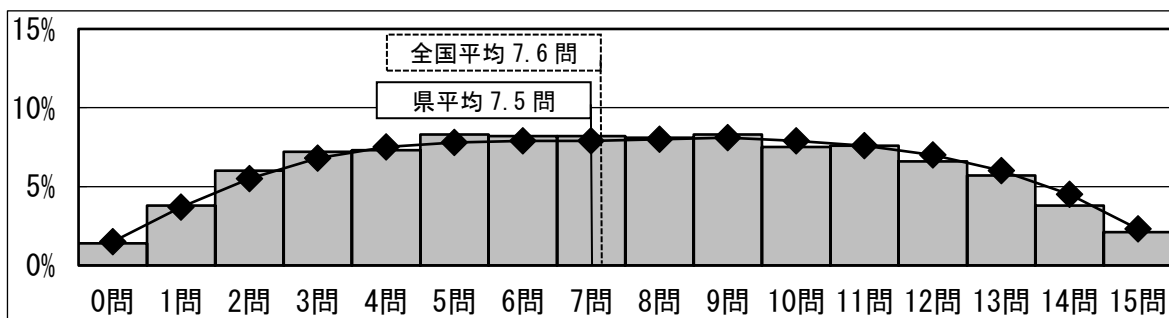
〔表Ⅱ-2〕 教科に関する調査の平均正答率及び平均正答数(中学校)

科目	区 分	平均正答率	平均正答数/全問数
国語	長野県(公立)	69%	10.3/15問
	全 国(公立)	69.8%	10.5/15問
数学	長野県(公立)	50%	7.5/15問
	全 国(公立)	51.0%	7.6/15問
英語	長野県(公立)	43%	7.3/17問
	全 国(公立)	45.6%	7.7/17問

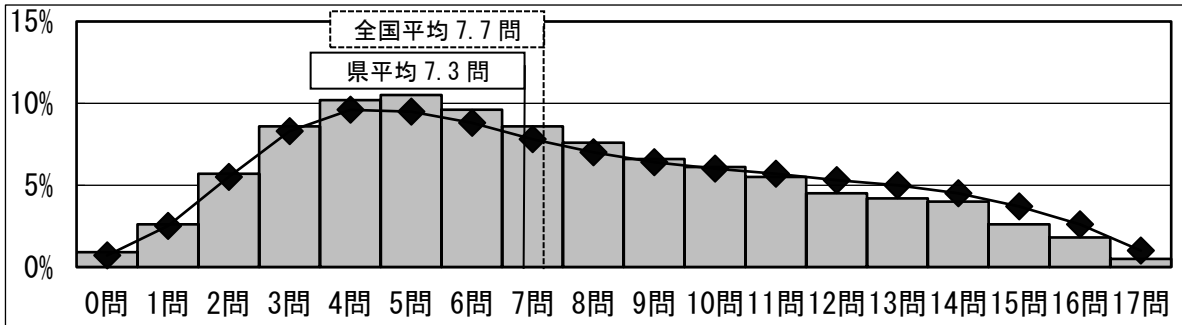
〔グラフⅡ-3〕 正答数分布グラフ(国語) ※グラフⅡ-3、4、5の横軸は正答数、縦軸は割合を示す。



〔グラフⅡ-4〕 正答数分布グラフ(数学)



〔グラフⅡ-5〕 正答数分布グラフ（英語）



(イ) 分析

- ・数学の平均正答数は、全国と同程度である。(表Ⅱ-2)
- ・国語の平均正答数は0.2ポイント、英語の平均正答数は0.4ポイント、全国を下回った。  
(表Ⅱ-2)
- ・国語、数学、英語の正答数の分布は、全国とほぼ同様の傾向である。  
(グラフⅡ-3、4、5)
- ・国語では、正答数が13問以上の生徒の割合が全国平均よりも低い。(グラフⅡ-3)
- ・英語では、正答数が4問から8問の生徒の割合が全国平均よりも高く、12問以上の生徒の割合が全国平均よりも低い。(グラフⅡ-5)

(2) これまで（平成19年度～令和5年度）の調査結果の経年変化と分析

ア 小学校における経年変化（平均正答率）と分析

(ア) 平均正答率

〔表Ⅱ-3〕 教科に関する調査の平均正答率の経年変化（小学校）

教科	県・全国	H19	H20	H21	H22*	H24*	H25	H26	H27	H28	H29	H30	教科	H31	R3	R4	R5			
		(悉皆)	(悉皆)	(悉皆)	(抽出)	(抽出)	(悉皆)	(悉皆)	(悉皆)	(悉皆)	(悉皆)	(悉皆)		(R元)	(悉皆)	(悉皆)	(悉皆)			
国語A	県(公立)	82	67	70	83~85	82~83	64	73	70	74	75	72	国語	64	63	66	66			
	全国(公立)	82	65	70	83~84	81~82	63	73	70	73	75	71		64	65	66	67			
	全国との差	0	+2	0			+1	0	0	+1	0	+1		0	-2	0	-1			
国語B	県(公立)	63	51	51	78~80	55~57	50	57	66	59	57	55								
	全国(公立)	62	51	51	78	55~56	49	56	65	58	58	55								
	全国との差	+1	0	0			+1	+1	+1	+1	-1	0								
算数A	県(公立)	84	72	80	73~75	72~74	78	79	75	77	78	62	算数	66	70	62	61			
	全国(公立)	82	72	79	74	73~74	77	78	75	78	79	64		67	70	63	63			
	全国との差	+2	0	+1			+1	+1	0	-1	-1	-2		-1	0	-1	-2			
算数B	県(公立)	64	51	54	48~49	58~60	60	59	45	47	46	50								
	全国(公立)	64	52	55	49~50	59	58	58	45	47	46	52								
	全国との差	0	-1	-1			+2	+1	0	0	0	-2								
理科	県(公立)					60~62			61			61					63			
	全国(公立)					61			61			60								63
	全国との差								0			+1								0

※H22年度、H24年度調査は抽出で実施されたため、全員を対象とした調査(悉皆調査)の平均正答率が95%の確率で含まれる範囲を「〇～〇」と示している。

※全国との差を示すために、全国(公立)の値は四捨五入し整数値で示してある。

(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

◆国語は、令和4年度における全国の平均正答率との差が0であったが、令和5年度は-1である。(表Ⅱ-3)

◆算数は、全国の平均正答率との差は、令和3年度が0、令和4年度は-1であったが、令和5年度は-2である。(表Ⅱ-3)

イ 中学校における経年変化(平均正答率)と分析

(ア) 平均正答率

〔表Ⅱ-4〕 教科に関する調査の平均正答率の経年変化(中学校)

教科	県・全国	H19 (悉皆)	H20 (悉皆)	H21 (悉皆)	H22* (抽出)	H24* (抽出)	H25 (悉皆)	H26 (悉皆)	H27 (悉皆)	H28 (悉皆)	H29 (悉皆)	H30 (悉皆)	教科	H31 (R元) (悉皆)	R3 (悉皆)	R4 (悉皆)	R5 (悉皆)		
国語A	県 (公立)	84	74	78	74~ 75	76~ 77	77	80	76	76	78	76	国語	73	65	68	69		
	全国 (公立)	82	74	77	75	75	76	79	76	76	77	76		73	65	69	70		
	全国との差	+2	0	+1			+1	+1	0	0	+1	0		0	0	-1	-1		
国語B	県 (公立)	73	61	75	63~ 65	63~ 65	66	49	65	66	72	61							
	全国 (公立)	72	61	75	65~ 66	63	67	51	66	67	72	61							
	全国との差	+1	0	0			-1	-2	-1	-1	0	0							
数学A	県 (公立)	73	63	63	61~ 64	61~ 64	62	67	64	61	64	65	数学	60	57	51	50		
	全国 (公立)	72	63	63	64~ 65	62	64	67	64	62	65	66		60	57	51	51		
	全国との差	+1	0	0			-2	0	0	-1	-1	-1		0	0	0	-1		
数学B	県 (公立)	62	50	57	40~ 43	47~ 50	40	58	41	44	48	46							
	全国 (公立)	61	49	57	43~ 44	49~ 50	42	60	42	44	48	47							
	全国との差	+1	+1	0			-2	-2	-1	0	0	-1							
理科	県 (公立)					50~ 52			53			66	英語	54	理科	50	英語	43	
	全国 (公立)					51			53			66		56				49	46
	全国との差								0			0		-2				+1	

※H22年度、H24年度調査は抽出で実施されたため、全員を対象とした調査(悉皆調査)の平均正答率が95%の確率で含まれる範囲を「〇~〇」と示している。

※全国との差を示すために、全国(公立)の値は四捨五入し整数値で示してある。

(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

◆国語は、全国の平均正答率との差は、令和5年度は令和4年度と同値の-1である。

(表Ⅱ-4)

◆数学は、全国の平均正答率との差について、平成31年度(令和元年度)から0で推移してきたが、令和5年度は-1である。(表Ⅱ-4)

◆英語は、全国の平均正答率との差について、前回の平成31年度(令和元年度)は-2であったが、令和5年度は-3である。(表Ⅱ-4)

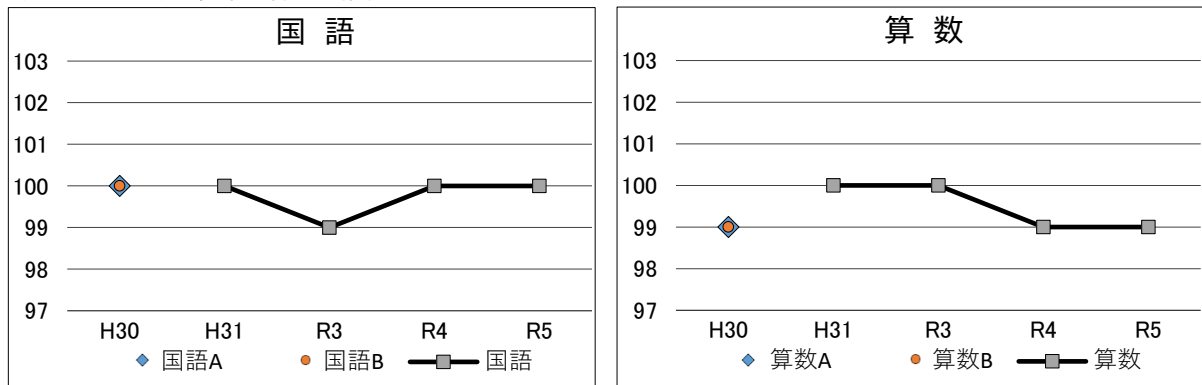
(3) 過去5回（平成30年度～令和5年度<sup>※1</sup>）の調査結果の経年変化と分析 ※1 令和2年度は未実施

ア 小学校の経年変化（標準化得点<sup>※2</sup>）と分析

※2 標準化得点…各年度の調査は問題が異なることから、平均正答率による単純な比較ができな  
 いため、年度間の相対的な比較をすることが可能となるよう、各年度の全国（公  
 立）の平均正答数がそれぞれ100となるように標準化した得点。

(ア) 標準化得点

〔グラフⅡ-6〕 標準化得点の推移



(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

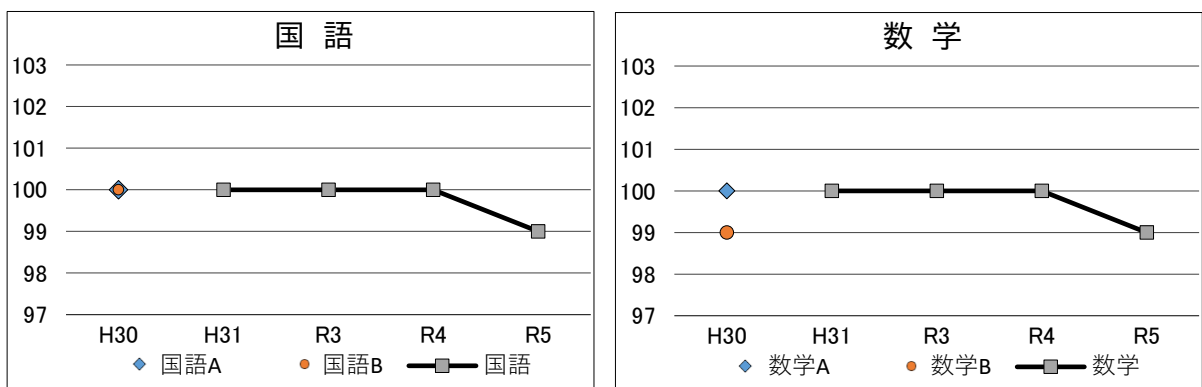
◇国語の標準化得点は、令和5年度は、令和4年度と同値で100である。(グラフⅡ-6)

◆算数の標準化得点は、令和5年度は、令和4年度と同値で99である。(グラフⅡ-6)

イ 中学校の経年変化（標準化得点<sup>※2</sup>）と分析

(ア) 標準化得点

〔グラフⅡ-7〕 標準化得点の推移



(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

◆国語の標準化得点は、平成30年度以降、100で推移してきたが、令和5年度は99に下がった。(グラフⅡ-7)

◆数学の標準化得点は、平成31年度以降、100で推移してきたが、令和5年度は99に下がった。(グラフⅡ-7)

◆英語の標準化得点は、令和5年度は、99であった。(※グラフなし)

(4) 過去5回（平成30年度～令和5年度<sup>※1</sup>）の調査結果の経年変化と分析 ※1 令和2年度は未実施

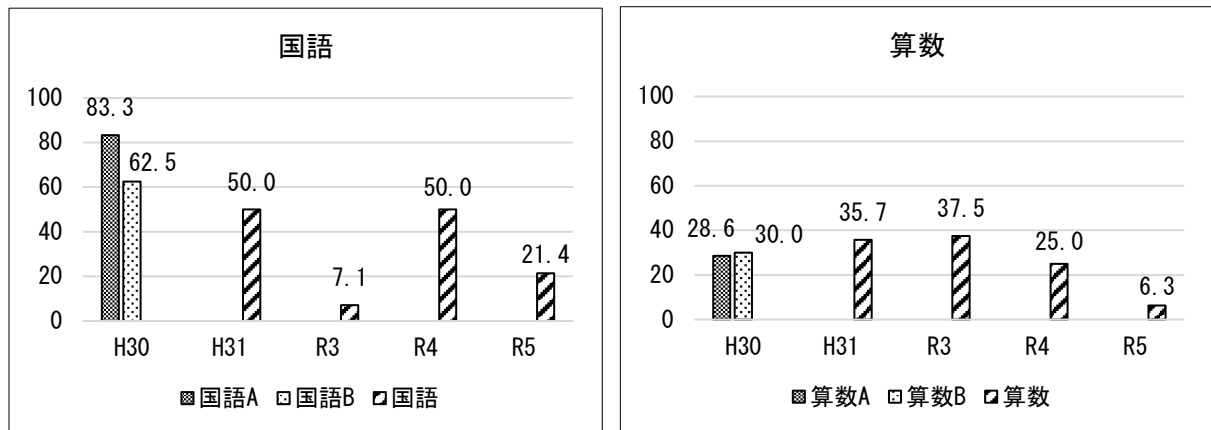
ア 小学校の経年変化（全国の平均正答率を上回った設問と無解答率）と分析

(ア) 全国の平均正答率を上回った設問数と無解答率

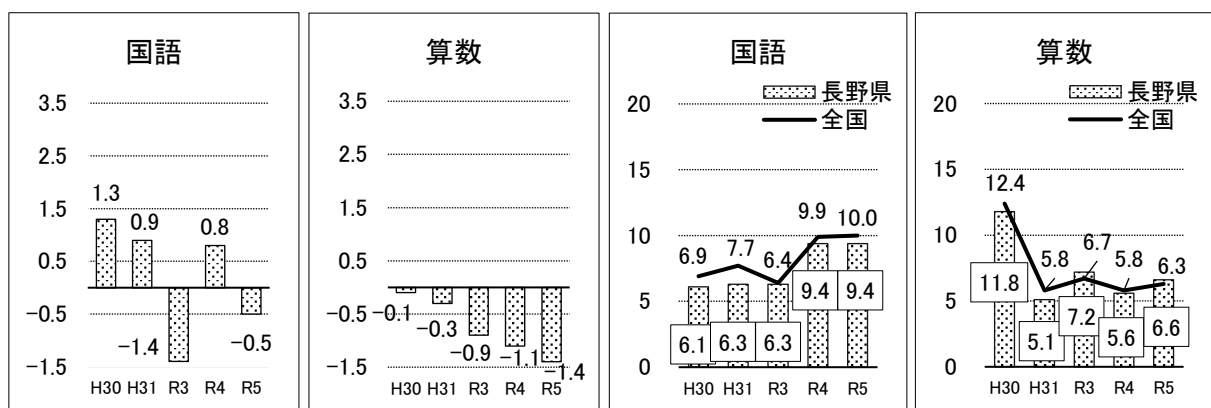
〔表Ⅱ-5〕 本県の平均正答率が全国の平均正答率を上回った設問数（同値は除く）

	国語A	国語B	算数A	算数B
平成30年度	10/12	5/8	4/14	3/10
	国語		算数	
平成31年度	7/14		5/14	
令和3年度	1/14		6/16	
令和4年度	7/14		4/16	
令和5年度	3/14		1/16	

〔グラフⅡ-8〕 本県の平均正答率が全国の平均正答率を上回った設問の割合（％）



〔グラフⅡ-9〕 記述問題の全国平均正答率との差（％）



(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

- ◆国語、算数ともに、令和5年度の平均正答率が全国を上回った設問の割合は、令和4年度より減少している。(グラフⅡ-8)
- ◆国語について、令和5年度の記述問題の平均正答率は全国を下回っている。(グラフⅡ-9)
- ◆算数について、令和5年度の記述問題の平均正答率は全国を下回り、平成30年度以降、全国より低い状態が続いている。(グラフⅡ-9)

◇国語について、記述問題における平均無解答率は、令和5年度、全国平均を下回っている。

(グラフⅡ-10)

◆算数について、記述問題における平均無解答率は、令和5年度、全国平均を上回っている。

(グラフⅡ-10)

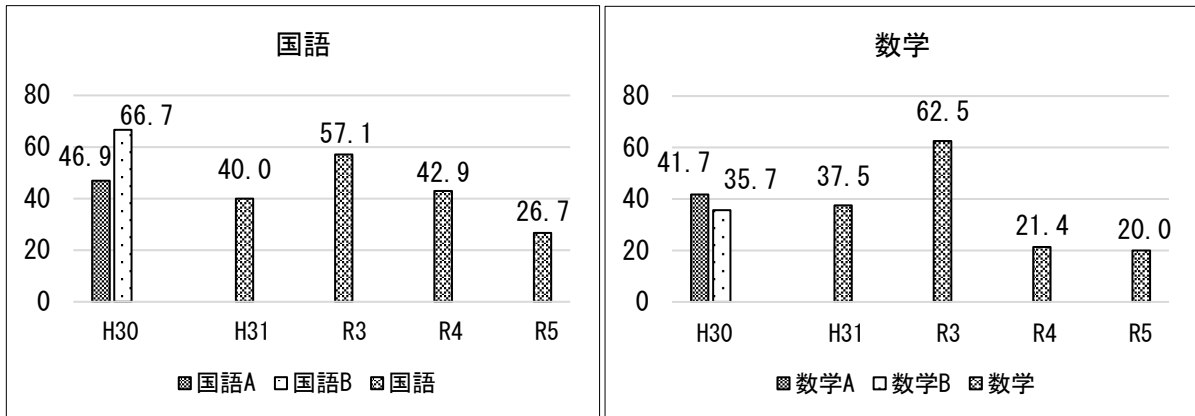
イ 中学校の経年変化（全国の平均正答率を上回った設問と無解答率）と分析

(ア) 全国の平均正答率を上回った設問と無解答率

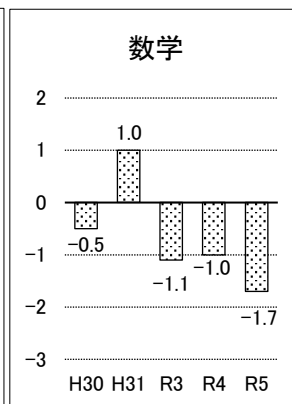
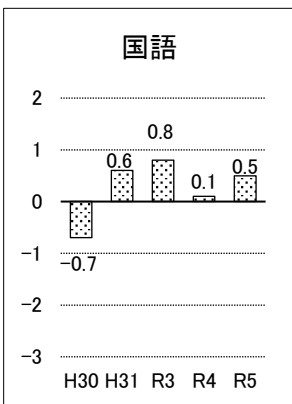
〔表Ⅱ-6〕 本県の平均正答率が全国の平均正答率を上回った設問数（同値は除く）

	国語A	国語B	数学A	数学B
平成30年度	15/32	6/9	15/36	5/14
	国語		数学	
平成31年度	4/10		6/16	2/21
令和3年度	8/14		10/16	
令和4年度	6/14		3/14	英語
令和5年度	4/15		3/15	2/17

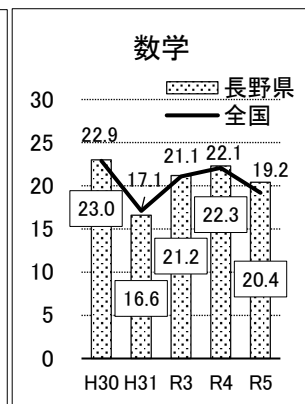
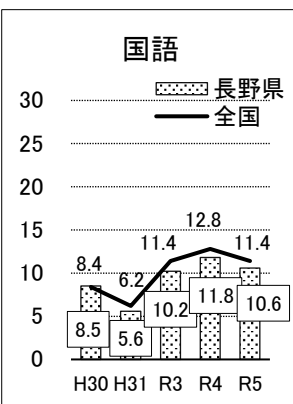
〔グラフⅡ-11〕 本県の平均正答率が全国の平均正答率を上回った設問の割合（％）



〔グラフⅡ-12〕 記述問題の全国平均正答率との差（％）



〔グラフⅡ-13〕 記述問題における平均無解答率（％）



(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

◆国語、数学ともに令和5年度の平均正答率が全国を上回った設問の割合は、令和4年度より減少している。(グラフⅡ-11)

◇国語について、平成 31 年度以降、記述問題の平均正答率は全国を上回っており、平均無解答率は、全国を下回っている。(グラフⅡ-12、グラフⅡ-13)

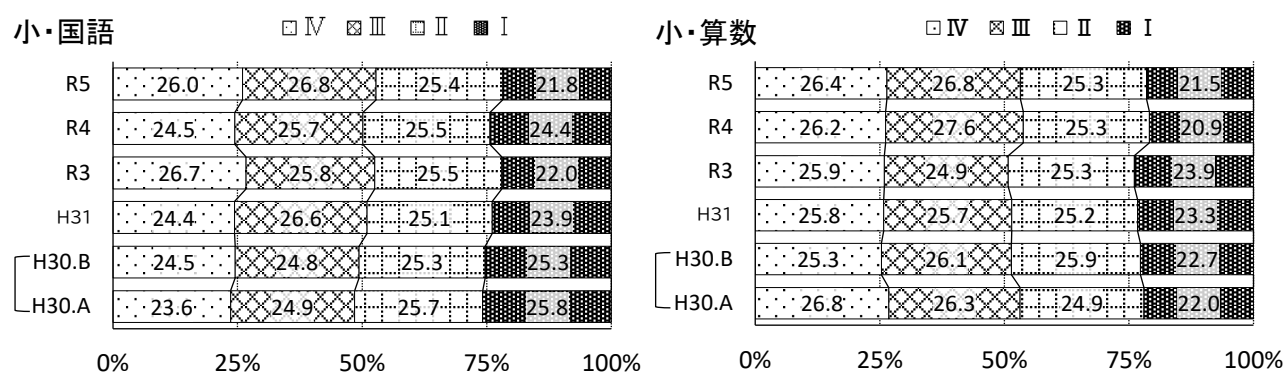
◆数学について、令和 5 年度の記述問題の平均正答率は、全国を下回っており、平均無解答率は、全国を上回っている。(グラフⅡ-12、グラフⅡ-13)

### ウ 小学校の経年変化（分布に着目した経年の状況）と分析

#### (ア) 分布に着目した経年の状況

全国の受検者を正答数の多い順に並べ、上位から 25%ずつ 4 分割(境界を含む階級の度数を按分することで、4 等分となるよう補正)し、それぞれの区分を I（上位 25%以内）、II（25%～50%）、III（50%～75%）、IV（75%～100%）とした上で、各区分に入る長野県の児童の割合を求めた。

〔グラフⅡ-14〕 分布に着目した経年の状況



※それぞれの帯グラフの合計値は、計算の都合上、100にならない場合もある。(例：99.9、100.1等)

#### (イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

◆国語は I 層の割合が令和 4 年度よりも減少し、III 層及び IV 層の割合が令和 4 年度よりも増加したことから、上位層の割合が令和 4 年度と比べて減少し、下位層の割合が令和 4 年度よりも増加していることがわかる。(グラフⅡ-14)

◇算数は I 層の割合が令和 4 年度よりもやや増加し、II 層の割合は同値であることから、上位層の割合が令和 4 年度と比べてやや増加していることがわかる。(グラフⅡ-14)

◆算数は、I 層の割合が 25%を下回り、IV 層の割合が 25%を上回っている状態が続いている。(グラフⅡ-14)

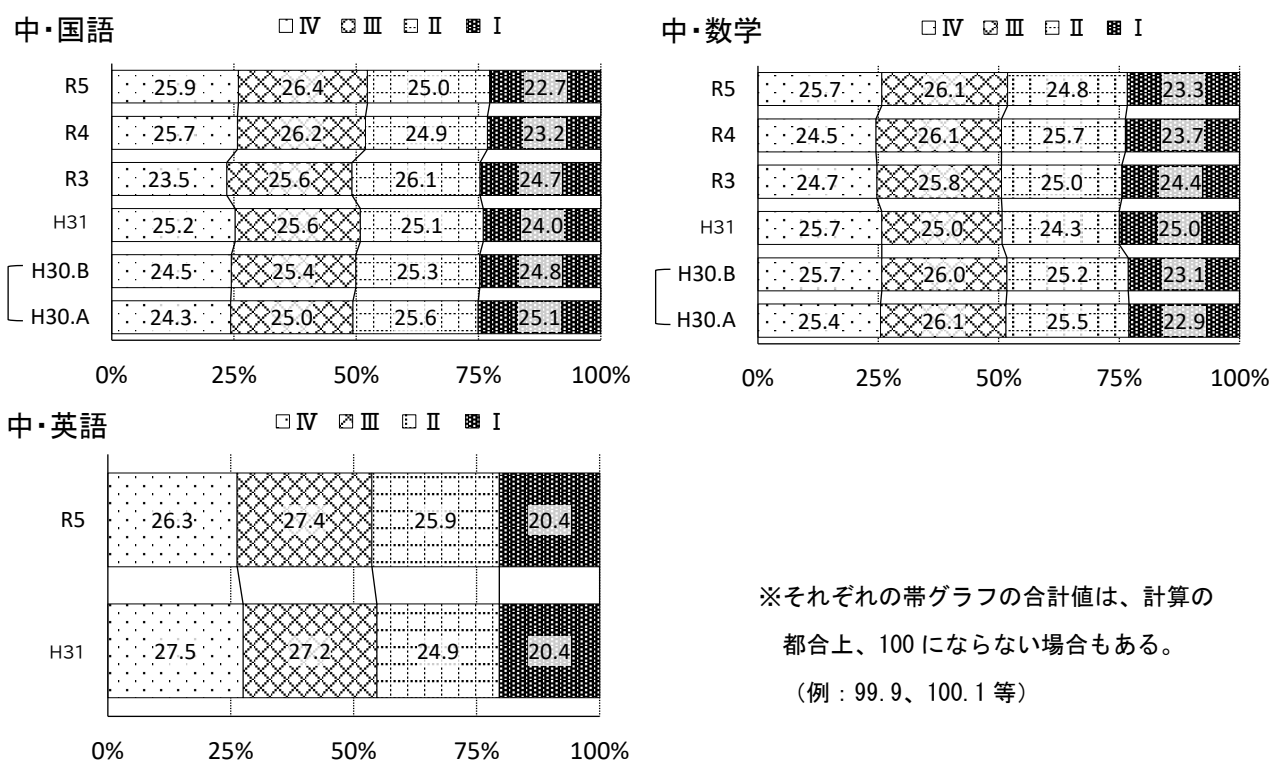
### エ 中学校の経年変化（分布に着目した経年の状況）と分析

#### (ア) 分布に着目した経年の状況

全国の受検者を正答数の多い順に並べ、上位から 25%ずつ 4 分割(境界を含む階級の度数を按分することで、4 等分となるよう補正)し、それぞれの区分を I（上位 25%以内）、II（25%～50%）、III（50%～75%）、IV（75%～100%）とした上で、各区分に入る長野県の生徒の割合を求めた。



〔グラフⅡ-15〕 分布に着目した経年の状況



※それぞれの帯グラフの合計値は、計算の都合上、100にならない場合もある。  
(例：99.9、100.1等)

(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

◆国語はI層の割合が令和4年度よりもやや減少し、III層及びIV層の割合が令和4年度よりもやや増加したことから、上位層の割合が令和4年度と比べてやや減少し、下位層の割合が令和4年度よりもやや増加していることがわかる。(グラフⅡ-15)

◆数学はI層及びII層の割合が令和4年度よりも減少し、IV層が増加したことから、上位層の割合が令和4年度と比べて減少し、下位層が増加していることがわかる。

(グラフⅡ-15)

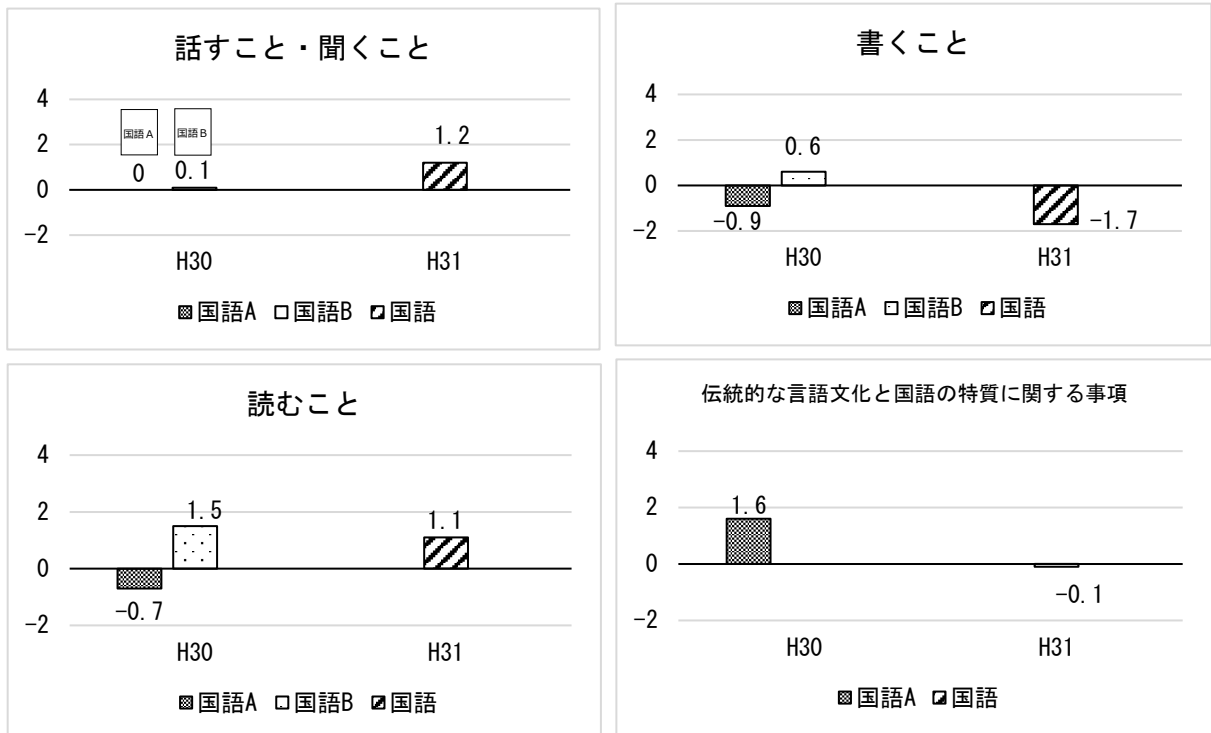
◇英語はI層の割合が平成31年度と同値で、IV層の割合が減少したことから、下位層の割合が平成31年度と比べて減少していることがわかる。(グラフⅡ-15)

### オ 小学校国語の経年変化と分析

(ア) 内容(領域等)、評価の観点、問題形式ごとの経年変化の状況

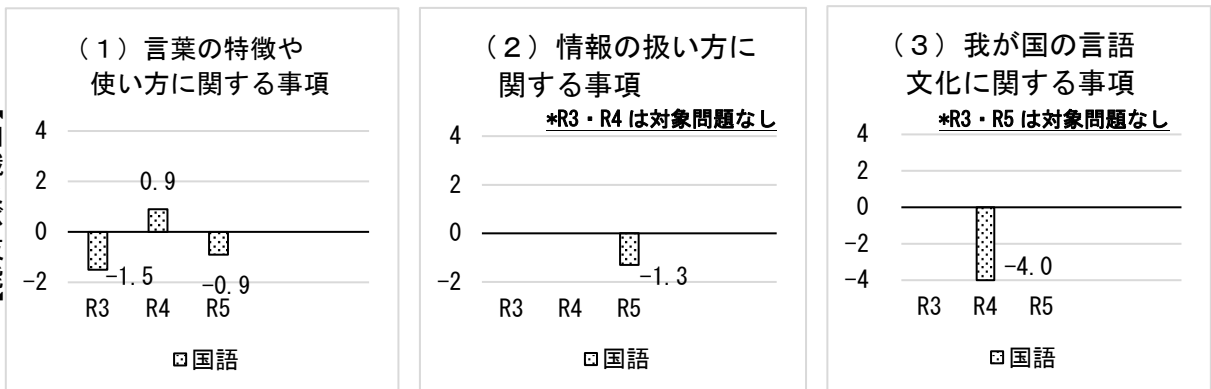
平成30年度から令和5年度までの学習指導要領の内容(領域等)、評価の観点、問題形式ごとの正答率について、全国の平均正答率と比較した。

〔グラフⅡ-16〕 学習指導要領の領域等ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差（％）（H30・31）

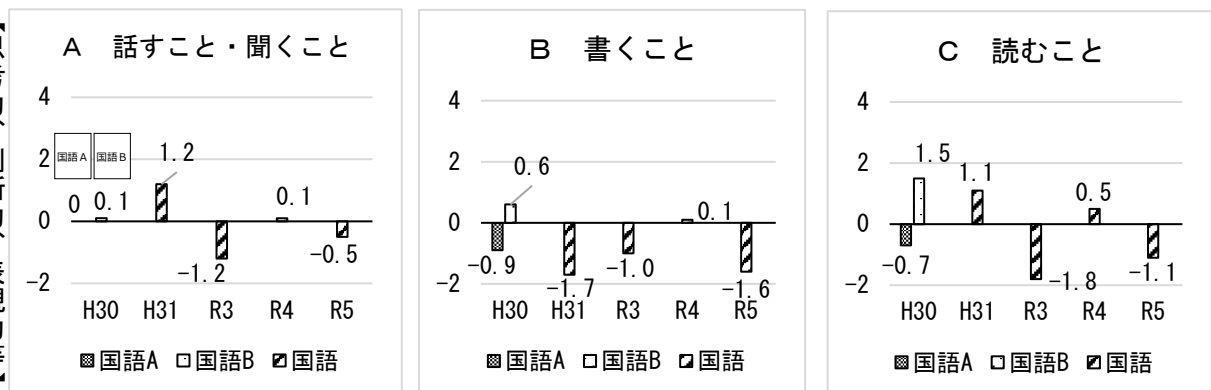


〔グラフⅡ-17〕 学習指導要領の内容ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差（％）（R3～）

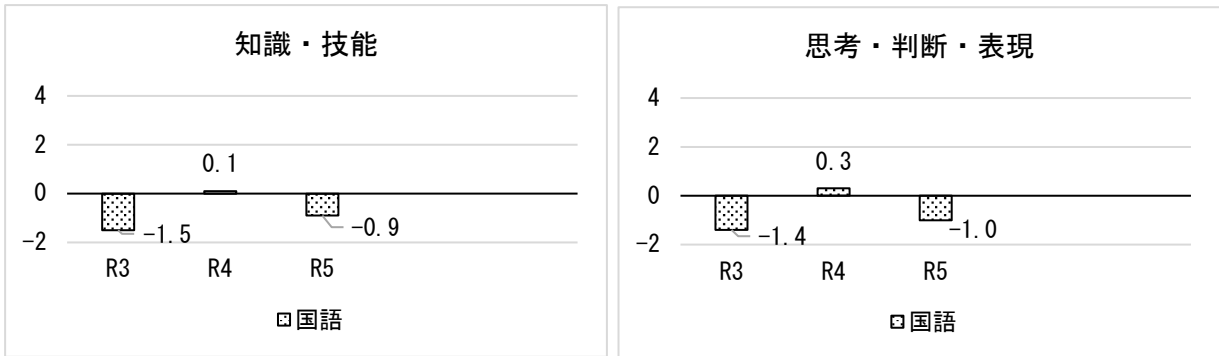
【知識及び技能】



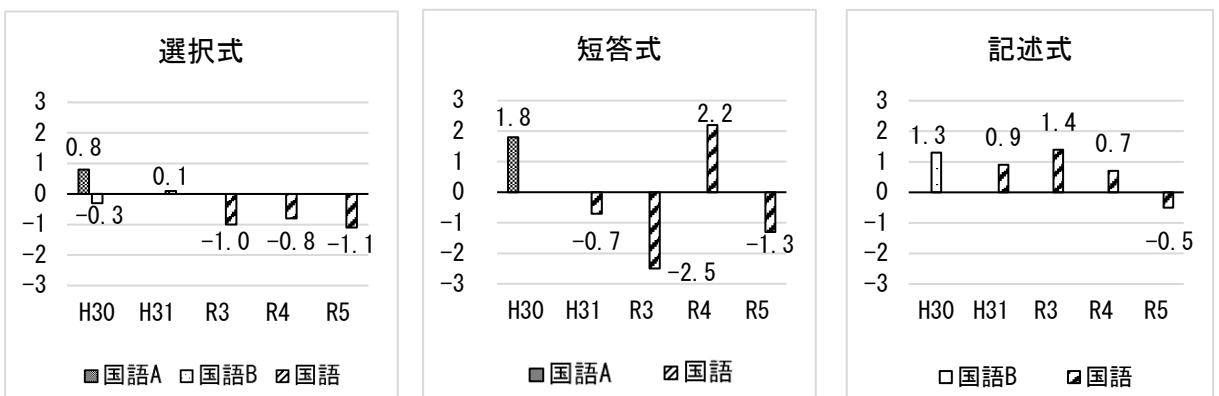
【思考力、判断力、表現力等】



〔グラフⅡ-18〕 評価の観点ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差（％）（R3～）



〔グラフⅡ-19〕 問題形式ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差（％）



(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

◆言葉の特徴や使い方に関する事項の平均正答率は、全国を1ポイント程度下回っている。

(グラフⅡ-17)

◆話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと及び評価の観点の知識・技能、思考・判断・表現の平均正答率は、全国を下回っている。(グラフⅡ-17、18)

◆選択式及び短答式の平均正答率は、全国を1ポイント程度下回っている。(グラフⅡ-19)

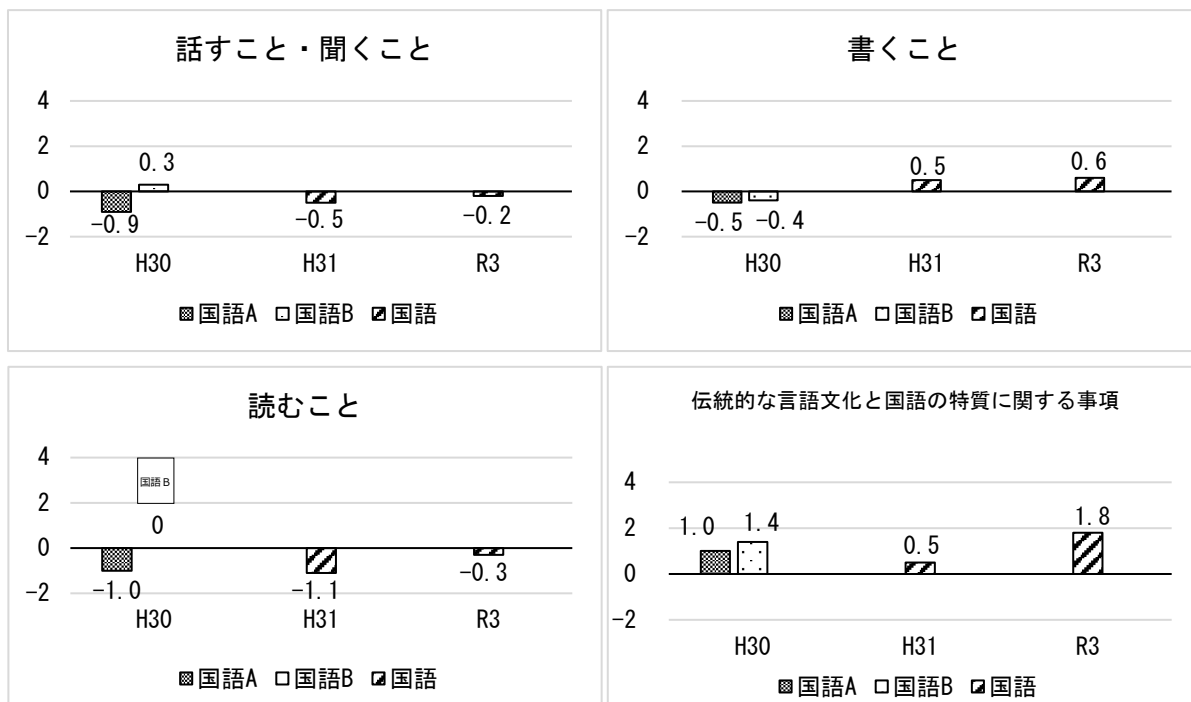
◆記述式は平成30年度以降、全国より高い状況が続いていたが、令和5年度は0.5ポイント全国を下回った。(グラフⅡ-19)

カ 中学校国語の経年変化と分析

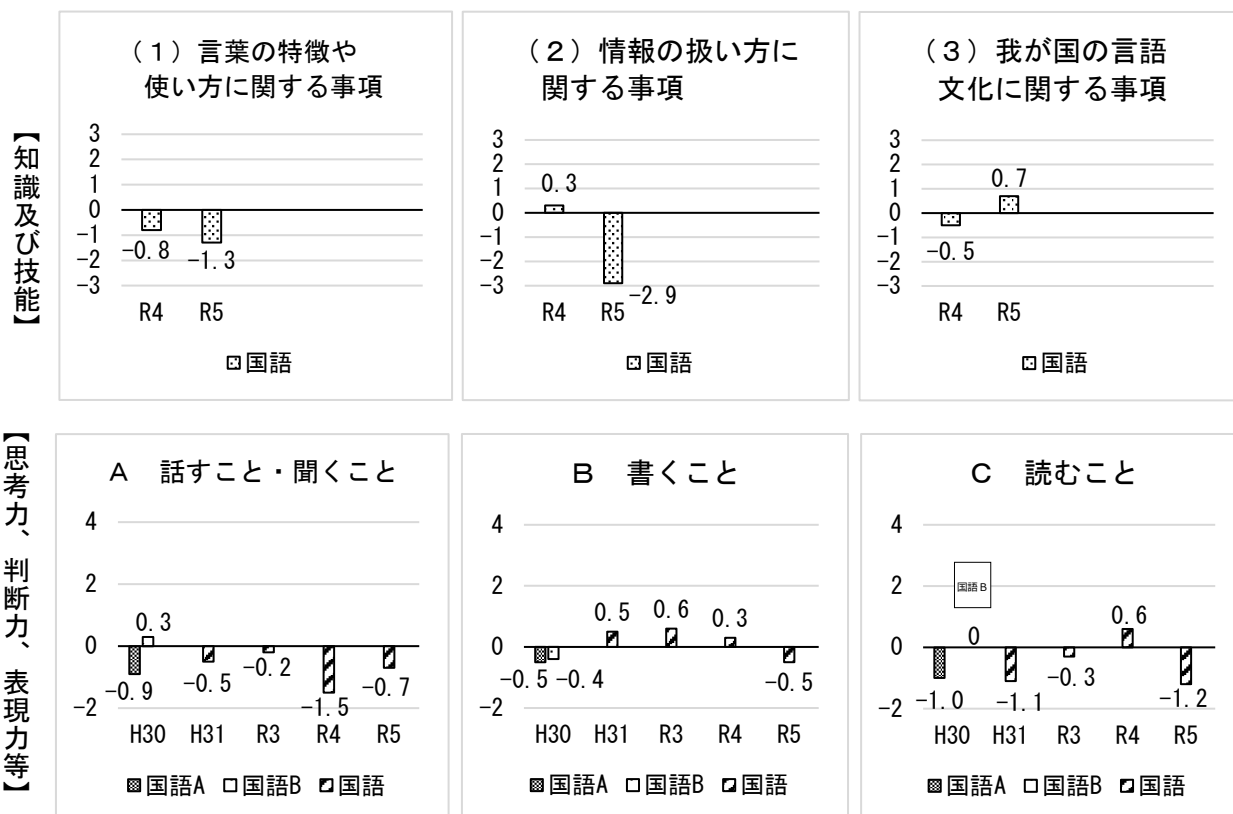
(ア) 内容（領域等）、評価の観点、問題形式ごとの経年変化の状況

小学校国語と同様に、中学校国語についても平成30年度から令和5年度までの学習指導要領の内容（領域等）、評価の観点、問題形式ごとの正答率について、全国の平均正答率と比較した。

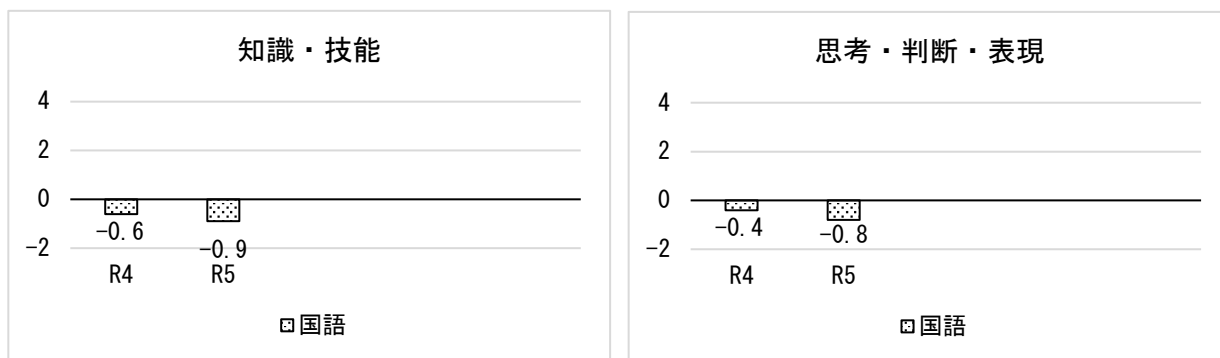
〔グラフⅡ-20〕 学習指導要領の領域等ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差（%）（H29～R3）



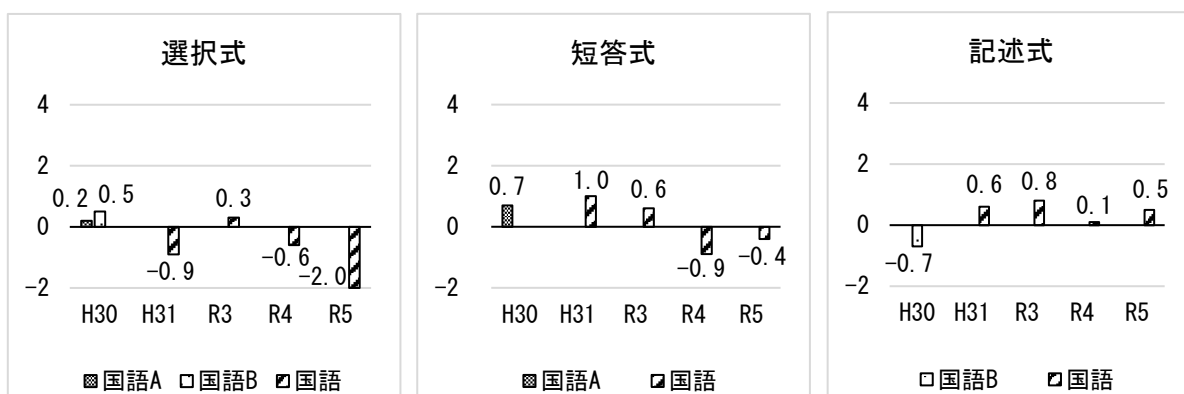
〔グラフⅡ-21〕 学習指導要領の内容ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差（%）（R4～）



[グラフⅡ-22] 評価の観点ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差(%) (R4~)



[グラフⅡ-23] 問題形式ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差(%)



(イ) 分析 ◇ : 成果 ◆ : 課題

◇我が国の言語文化に関する事項の平均正答率は、全国を0.7ポイント上回っている。

(グラフⅡ-21)

◆言葉の特徴や使い方に関する事項及び情報の扱い方に関する事項の平均正答率は、全国を下回っている。(グラフⅡ-21)

◆小学校国語同様、話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと及び評価の観点の知識・技能、思考・判断・表現の平均正答率は、全国を下回っている。(グラフⅡ-21・22)

◇記述式の平均正答率は、平成31年度から全国を上回る状況が続いている。(グラフⅡ-23)

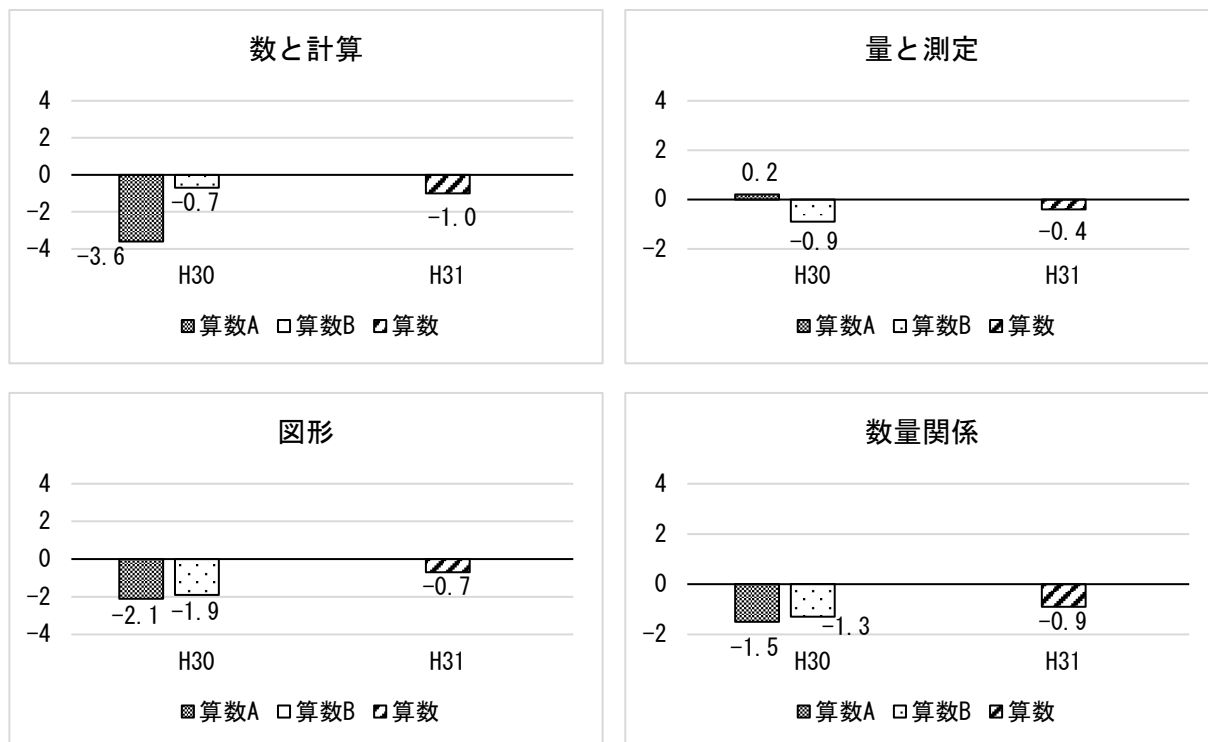
◆選択式及び短答式の平均正答率は、全国を下回っている。(グラフⅡ-23)

キ 小学校算数の経年変化と分析

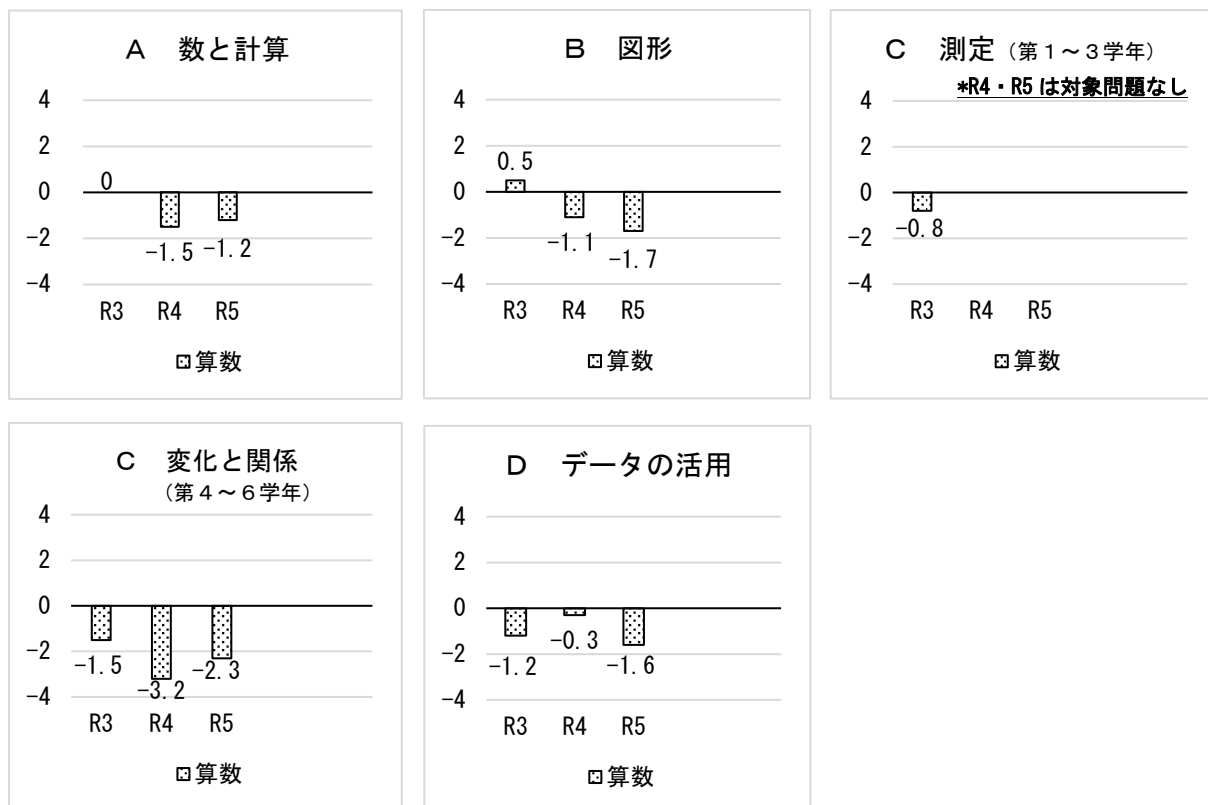
(ア) 領域、評価の観点、問題形式ごとの経年変化の状況

平成30年度から令和5年度までの学習指導要領の領域、評価の観点、問題形式ごとの正答率について、全国の平均正答率と比較した。

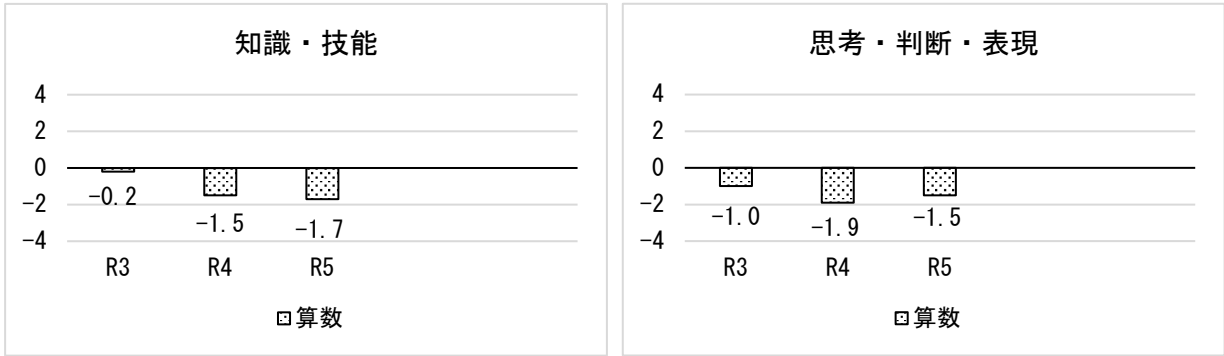
〔グラフⅡ-24〕 学習指導要領の領域ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差(%) (H30・H31)



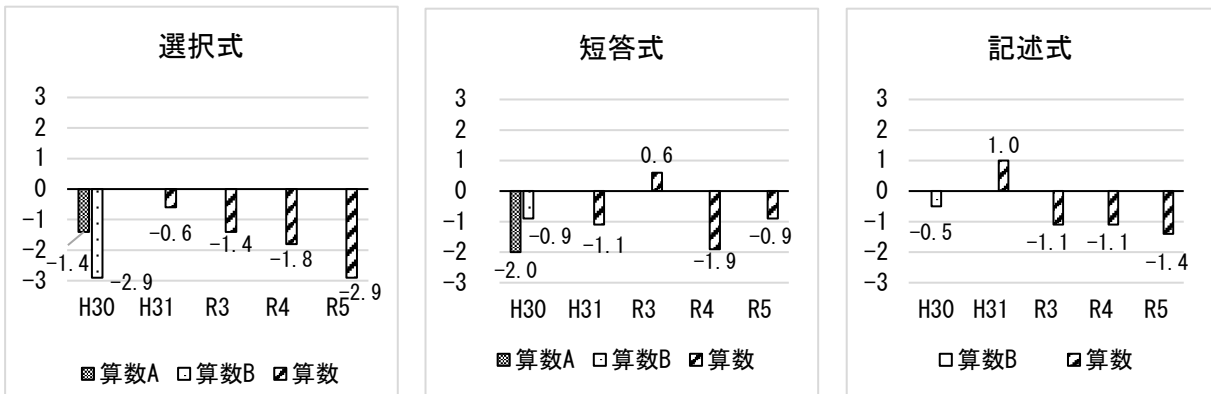
〔グラフⅡ-25〕 学習指導要領の領域ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差(%) (R3～)



〔グラフⅡ-26〕 評価の観点ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差（％）（R3～）



〔グラフⅡ-27〕 問題形式ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差（％）



(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

◆全ての領域において、平均正答率は全国を下回っている。(グラフⅡ-25)

◆評価の観点の知識・技能、思考・判断・表現の平均正答率は、全国を下回っている。

(グラフⅡ-26)

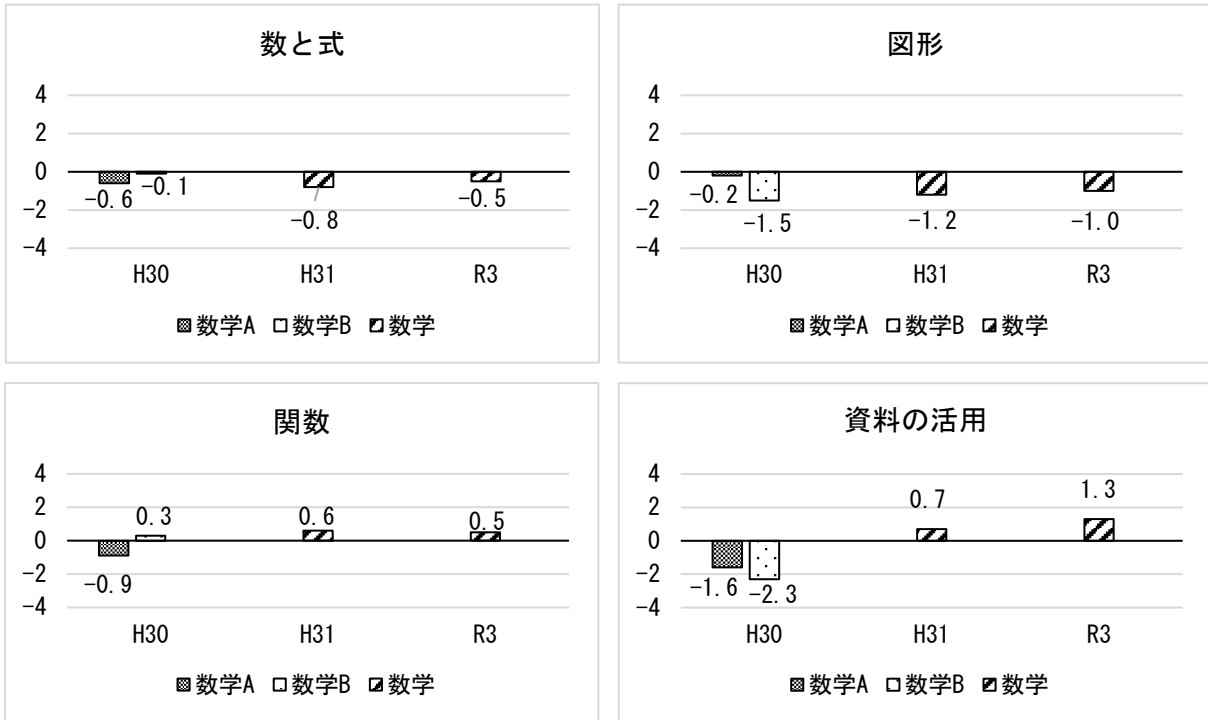
◆問題形式ごとの平均正答率は、全て全国を下回っている。特に選択式について、全国との差が平成31年度以降、年々増加している。(グラフⅡ-27)

ク 中学校数学の経年変化と分析

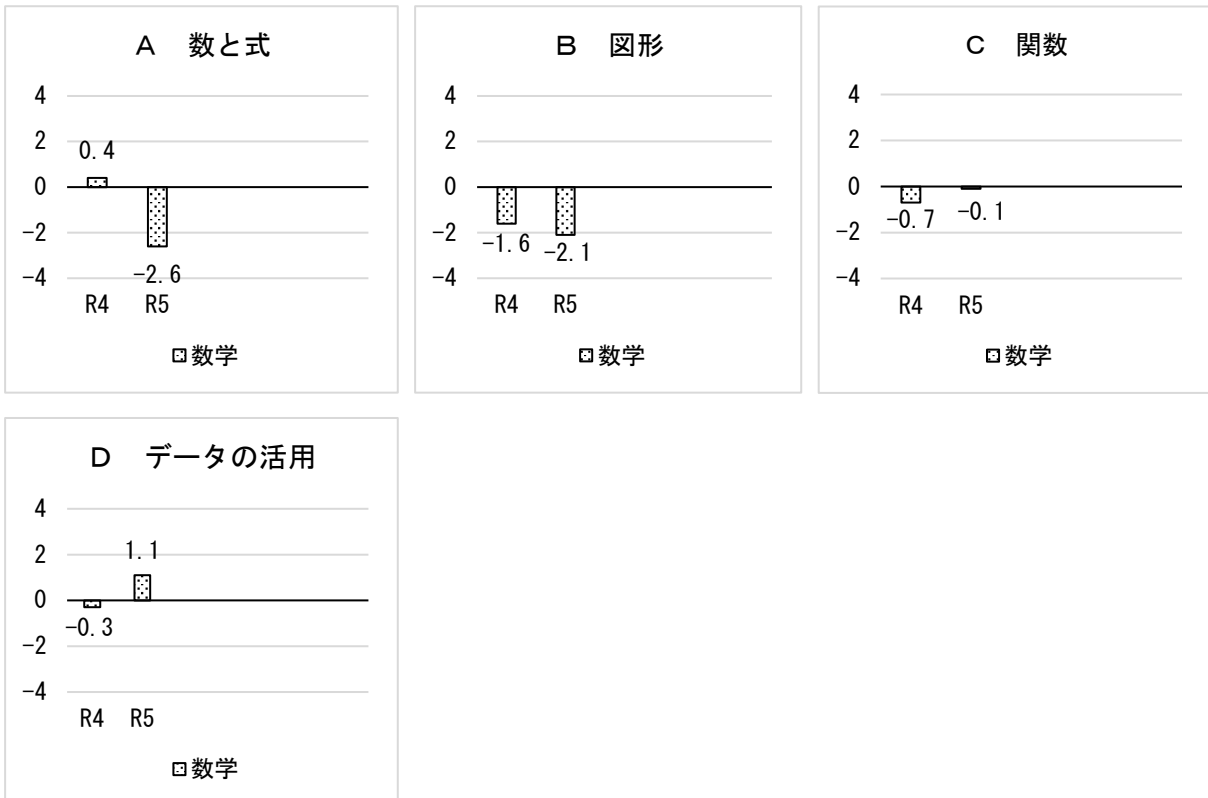
(ア) 領域、評価の観点、問題形式ごとの経年変化の状況

算数と同様に、数学についても、領域、評価の観点、問題形式ごとの正答率について、全国の平均正答率と比較した。

〔グラフⅡ-28〕 領域ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差（％）（H30～R3）

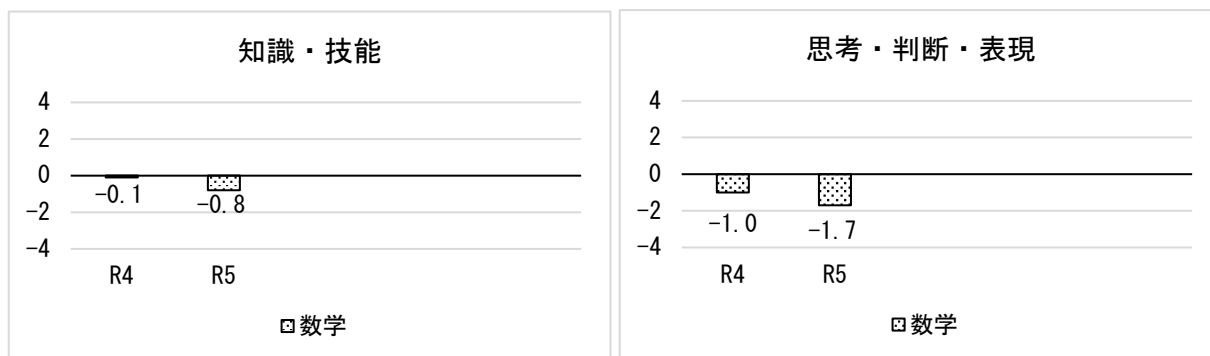


〔グラフⅡ-29〕 領域ごとの本県の平均正答率と全国の平均正答率との差（％）（R4～）

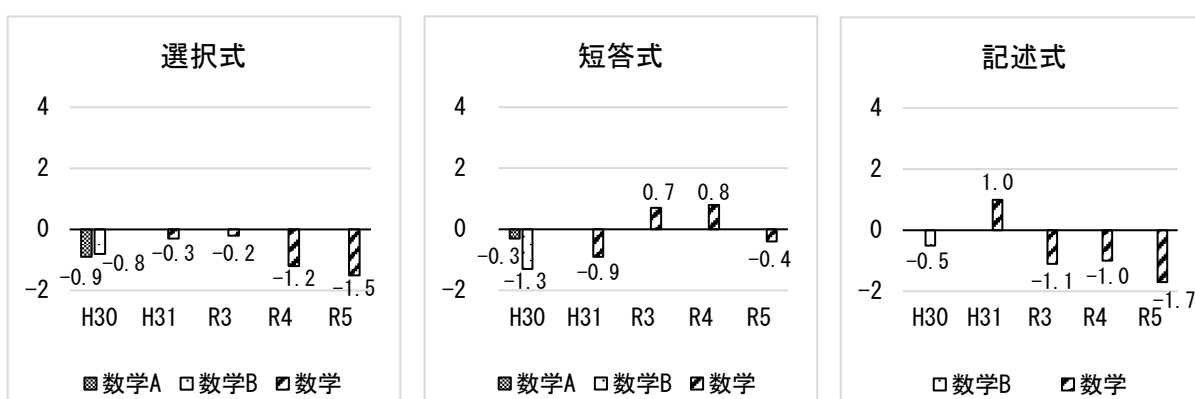




〔グラフⅡ-30〕 評価の観点ごとの本県の平均正答率と全国平均正答率との差（％）（R4～）



〔グラフⅡ-31〕 問題形式ごとの本県の平均正答率と全国平均正答率との差（％）



(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

◇データの活用の領域の平均正答率は、令和4年度は全国を下回っていたが、令和5年度は全国を上回っている。(グラフⅡ-29)

◆数と式、図形、関数の領域の平均正答率は、全国を下回っている。(グラフⅡ-29)

◆小学校算数同様、評価の観点の知識・技能、思考・判断・表現の平均正答率は、全国を下回っている。(グラフⅡ-30)

◇短答式の平均正答率は、令和3年度、令和4年度と全国を上回っていたが、令和5年度は全国を下回っている。(グラフⅡ-31)

## 2 質問紙調査の結果と分析

### (1) 令和5年度 質問紙調査の結果と分析

児童生徒を対象とする質問紙調査と、学校（教師）を対象とする質問紙調査の項目を分類<sup>(※1)</sup>し、それぞれを「児童生徒」、「学校運営」に整理し、領域ごとに全国を100としてスコア化<sup>(※2)</sup>した。

「児童生徒」、「学校運営」の領域は次のとおりである。

#### 「児童生徒」 児童：5領域 生徒：6領域

- 学習に対する興味・関心
  - ・国語への関心等
  - ・算数(数学)への関心等
  - ・英語への関心等 \*生徒のみ
- 規範意識・自己有用感
  - ・規範意識
  - ・自己有用感
- 生活習慣・学習習慣
  - ・生活習慣・学習習慣

#### 「学校運営」 小学校：7領域 中学校：8領域

- 教科指導
  - ・国語科の指導方法
  - ・算数(数学)科の指導方法
  - ・英語科の指導方法 \*中学校のみ
- 授業改善・生徒指導
  - ・授業改善
  - ・生徒指導
- 学校経営
  - ・学校運営
  - ・教職員の資質能力の向上
  - ・家庭や地域との連携等

※1：各領域に対応する質問項目は、文部科学省が結果チャートを作成する際に用いた分類に沿う。

※2：該当する領域に含まれる個別の質問項目の回答結果の割合を基に基礎値を算出し、領域ごとの平均値を算出する。全国の平均値に対する長野県の平均値を各領域のスコアとして、事務局でスコアを算出した。

ア 小学校調査

(ア) 結果

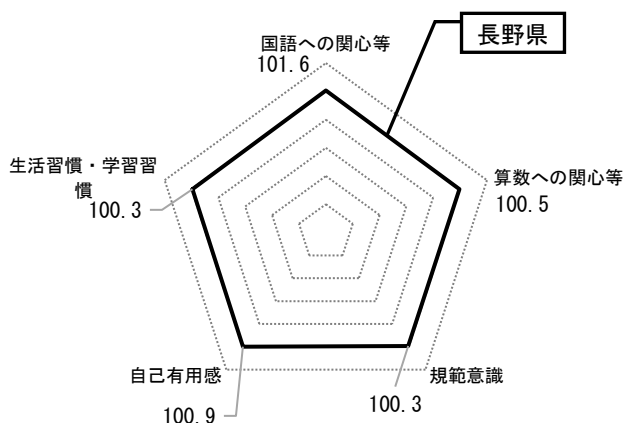
〔表Ⅱ-7〕 〔児童〕のスコア（小学校）

領域名		スコア
学習に対する 興味・関心	国語への関心等	101.6
	算数への関心等	100.5
規範意識・ 自己有用感	規範意識	100.3
	自己有用感	100.9
生活習慣・ 学習習慣	生活習慣・学習習慣	100.3

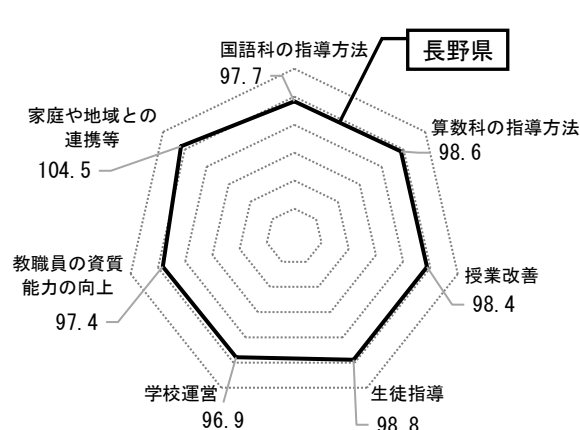
〔表Ⅱ-8〕 〔学校運営〕のスコア（小学校）

領域名		スコア
教科指導	国語科の指導方法	97.7
	算数科の指導方法	98.6
授業改善・ 生徒指導	授業改善	98.4
	生徒指導	98.8
学校経営	学校運営	96.9
	教職員の資質能力の向上	97.4
	家庭や地域との連携等	104.5

〔グラフⅡ-32〕 〔児童〕のスコア（小学校）



〔グラフⅡ-33〕 〔学校運営〕のスコア（小学校）



(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

◇ 〔児童〕では、いずれの領域においても全国を上回っている。(表Ⅱ-7、グラフⅡ-32)

◇ 〔学校運営〕では、家庭や地域との連携等が4.5ポイント全国平均を上回っている。

(表Ⅱ-8、グラフⅡ-33)

◆ 〔学校運営〕では、令和4年度同様、国語科及び数学科の指導方法、授業改善、生徒指導、学校運営、教職員の資質能力の向上が全国平均を下回っている。

(表Ⅱ-8、グラフⅡ-33)

イ 中学校調査

(ア) 結果

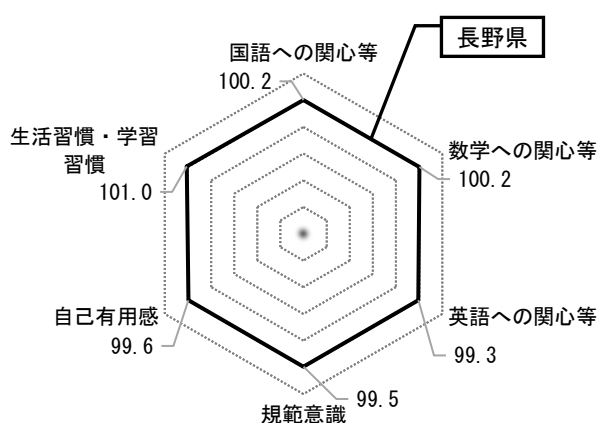
〔表Ⅱ-9〕 [生徒] のスコア (中学校)

領域名		スコア
学習に対する 興味・関心	国語への関心等	100.2
	数学への関心等	100.2
	英語への関心等	99.3
規範意識・ 自己有用感	規範意識	99.5
	自己有用感	99.6
生活習慣・ 学習習慣	生活習慣・学習習慣	101.0

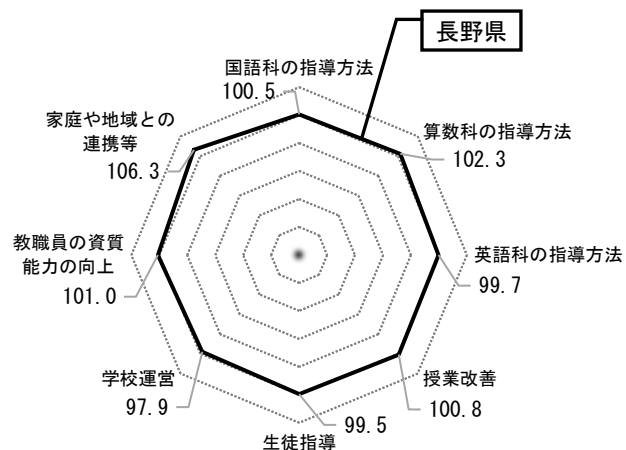
〔表Ⅱ-10〕 [学校運営] のスコア (中学校)

領域名		スコア
教科指導	国語科の指導方法	100.5
	算数科の指導方法	102.3
	英語科の指導方法	99.7
授業改善・ 生徒指導	授業改善	100.8
	生徒指導	99.5
学校経営	学校運営	97.9
	教職員の資質能力の向上	101.0
	家庭や地域との連携等	106.3

〔グラフⅡ-34〕 [生徒] のスコア (中学校)



〔グラフⅡ-35〕 [学校運営] のスコア (中学校)



※全国を100とする

(イ) 分析 ◇: 成果 ◆: 課題

◇ [生徒] では、国語への関心等、数学への関心等、生活習慣・学習習慣で全国を上回っている。(表Ⅱ-9、グラフⅡ-34)

◆ [生徒] では、英語への関心等、規範意識、自己有用感で、いずれも1ポイント未満、全国を下回っている。(表Ⅱ-9、グラフⅡ-34)

◇ [学校運営] では、特に家庭や地域との連携等が高く、全国を6.3ポイント上回っている。(表Ⅱ-10、グラフⅡ-35)

◆ [学校運営] では、特に学校運営が低く、2.1ポイント全国を下回っている。

(表Ⅱ-10、グラフⅡ-35)

(2) 過去3回（令和3年度～令和5年度）の調査結果の経年変化と分析

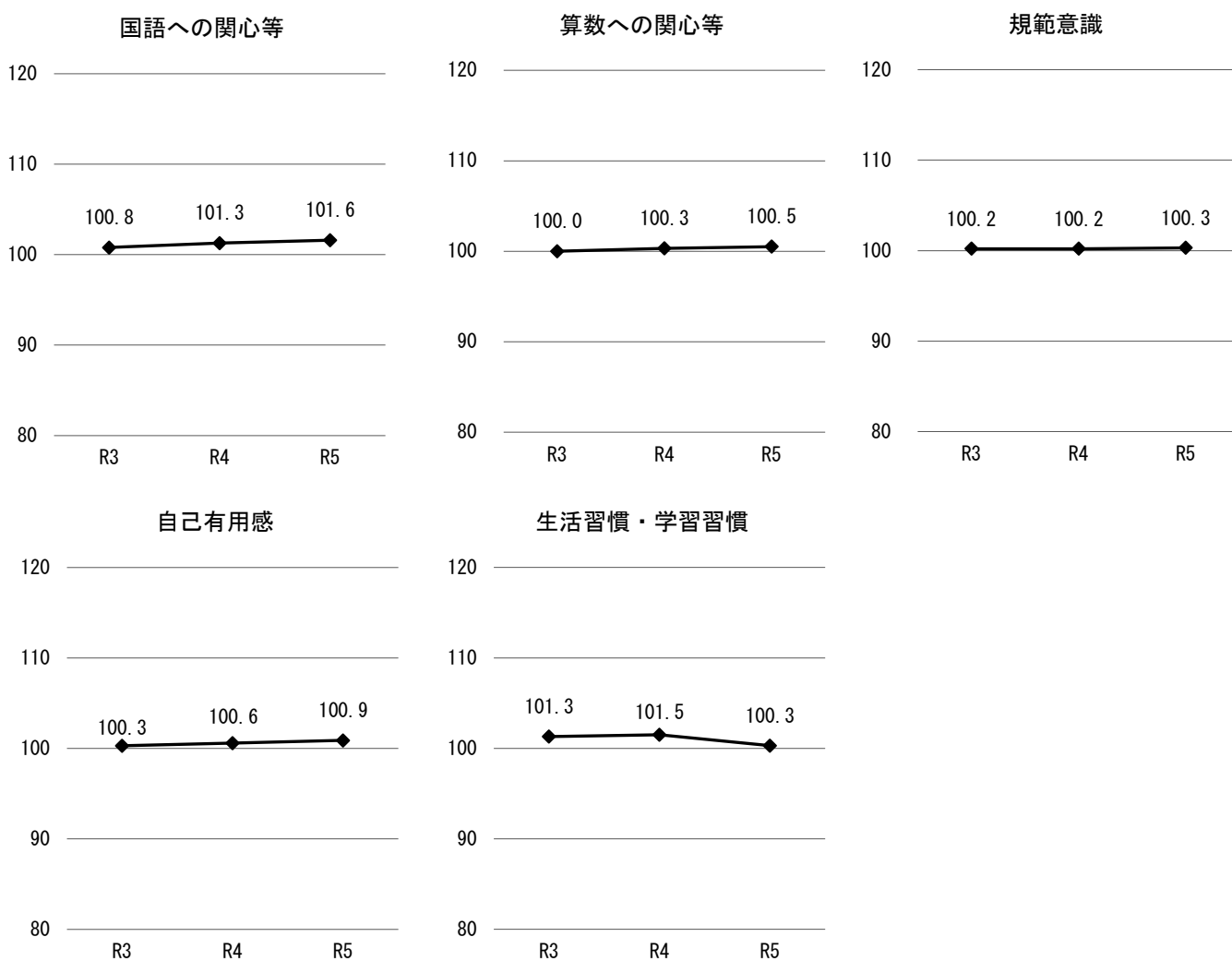
ア 小学校調査

(ア) 経年変化

〔表Ⅱ-11〕 〔児童〕のスコアの経年変化

領域名		R3	R4	R5
学習に対する 興味・関心	国語への関心等	100.8	101.3	101.6
	算数への関心等	100.0	100.3	100.5
規範意識・ 自己有用感	規範意識	100.2	100.2	100.3
	自己有用感	100.3	100.6	100.9
生活習慣・学習習慣	生活習慣・学習習慣	101.3	101.5	100.3

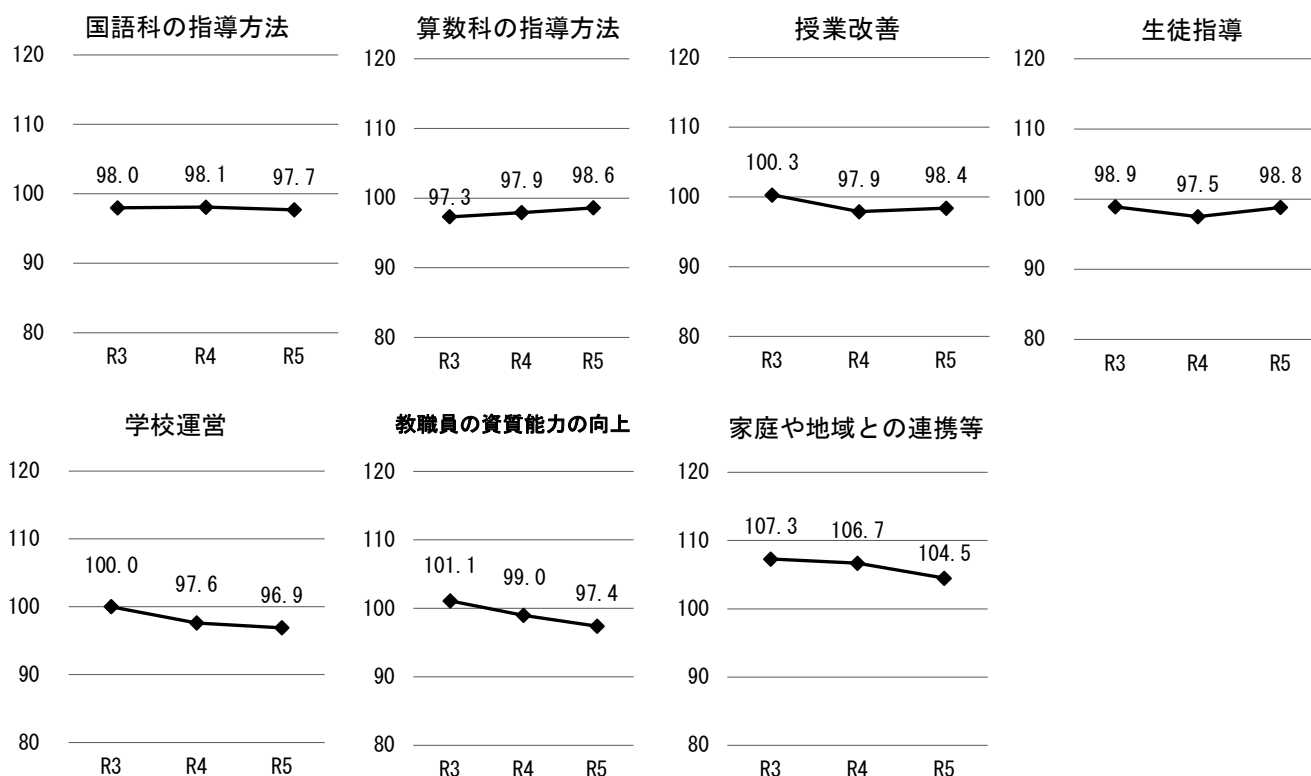
〔グラフⅡ-36〕 〔児童〕のスコアの経年変化



〔表Ⅱ-12〕 〔学校運営〕のスコアの経年変化

領域名		R3	R4	R5
教科指導	国語科の指導方法	98.0	98.1	97.7
	算数科の指導方法	97.3	97.9	98.6
授業改善・生徒指導	授業改善	100.3	97.9	98.4
	生徒指導	98.9	97.5	98.8
学校経営	学校運営	100.0	97.6	96.9
	教職員の資質能力の向上	101.1	99.0	97.4
	家庭や地域との連携等	107.3	106.7	104.5

〔グラフⅡ-37〕 〔学校運営〕のスコアの経年変化



(イ) 分析 ◇：成果 ◆：課題

◇ [児童] では、学習習慣・生活習慣以外は、令和3年度から増加している。

(表Ⅱ-11、グラフⅡ-36)

◇ [学校運営] では、算数科の指導方法が全国より下回っているものの、令和3年度から少しずつ上昇している。(表Ⅱ-12、グラフⅡ-37)

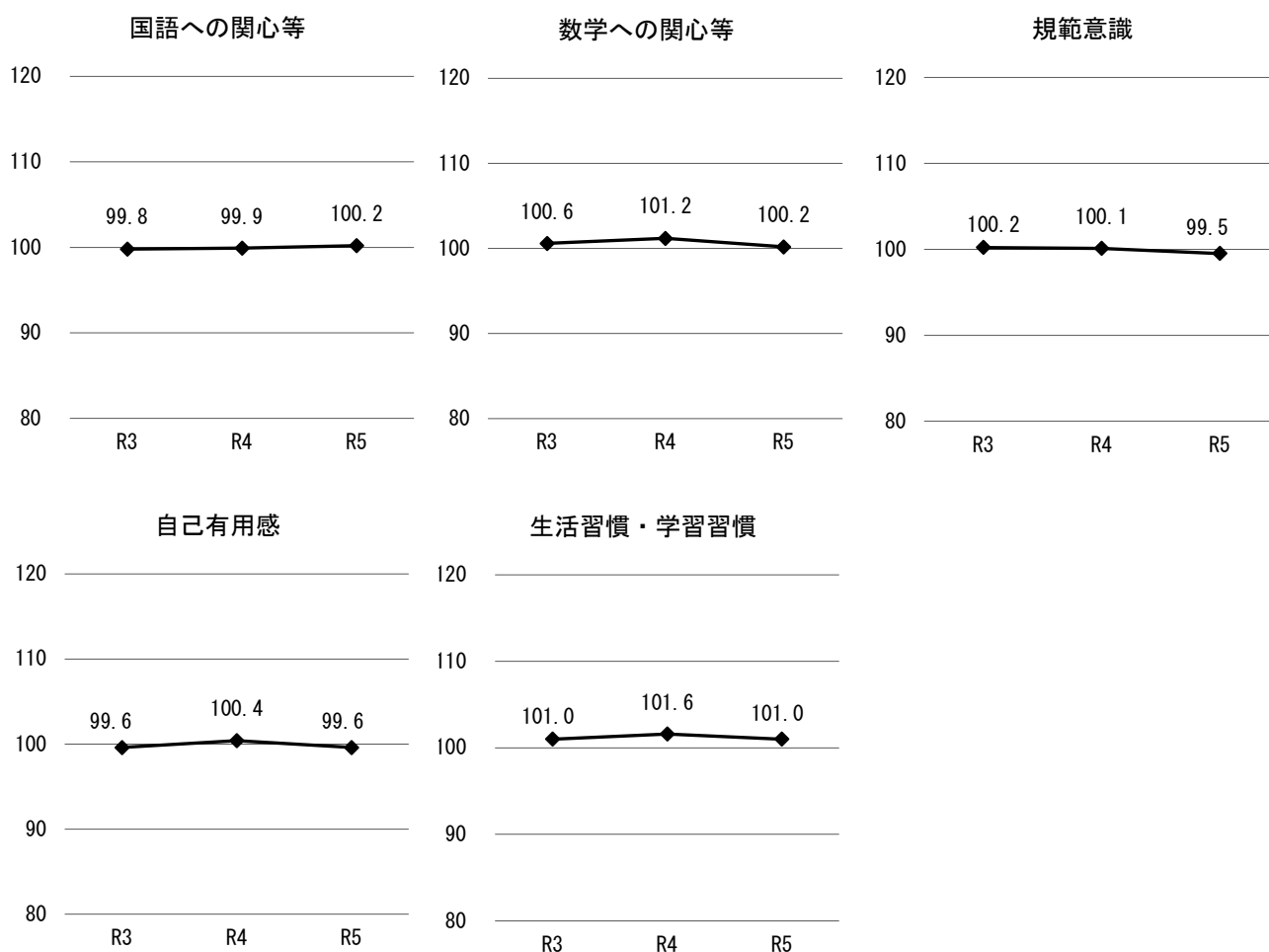
◆ [学校運営] では、学校運営、教職員の資質能力の向上が令和3年度から減少し、全国を下回っている。(表Ⅱ-12、グラフⅡ-37)

イ 中学校調査  
 (ア) 経年変化

〔表Ⅱ-13〕 [生徒] のスコアの経年変化

領域名		R3	R4	R5
学習に対する 興味・関心	国語への関心等	99.8	99.9	100.2
	数学への関心等	100.6	101.2	100.2
	英語への関心等		102.5	99.3
規範意識・ 自己有用感	規範意識	100.2	100.1	99.5
	自己有用感	99.6	100.4	99.6
生活習慣・学習習慣	生活習慣・学習習慣	101.0	101.6	101.0

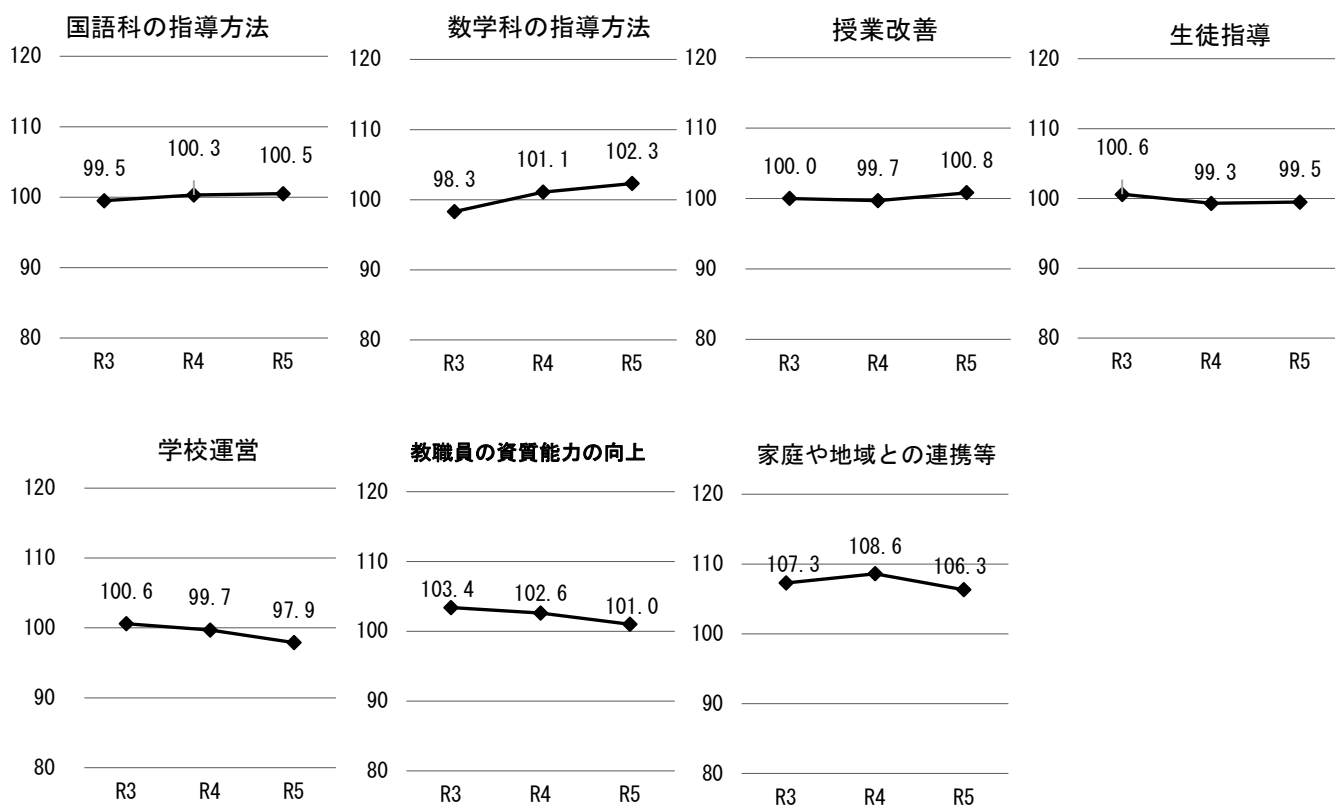
〔グラフⅡ-38〕 [生徒] のスコアの経年変化



〔表Ⅱ-14〕 〔学校運営〕のスコアの経年変化

領域名		R3	R4	R5
教科指導	国語科の指導方法	99.5	100.3	100.5
	数学科の指導方法	98.3	101.1	102.3
	英語科の指導方法			99.7
授業改善・生徒指導	授業改善	100.0	99.7	100.8
	生徒指導	100.6	99.3	99.5
学校経営	学校運営	100.6	99.7	97.9
	教職員の資質能力の向上	103.4	102.6	101.0
	家庭や地域との連携等	107.3	108.6	106.3

〔グラフⅡ-39〕 〔学校運営〕のスコアの経年変化



(イ) 分析 ◇ : 成果 ◆ : 課題

◇ [生徒] のスコアは、国語への関心等、数学への関心等、生活習慣・学習習慣で全国を上回っている。特に、国語への関心等は令和3年度以降上昇傾向にある。

(表Ⅱ-13、グラフⅡ-38)

◇ [学校運営] の家庭や地域との連携等は、令和3年度から継続して全国を6ポイント以上上回っている。(表Ⅱ-14、グラフⅡ-39)

◆ [学校運営] では、学校運営が令和3年以降下降し、全国を下回っている。

(表Ⅱ-14、グラフⅡ-39)